ちょっとブレイクしませんか?

風と共に去りぬ【1939年】

第10回

イソップ寓話集に「振分け袋」と題する小話がある。「その昔、プロメテウス※は人間を造ると、二つの袋を首に掛けさせた。一つは他人の欠点、もう一つは自分の悪い所を入れる袋で、他人用の袋は体の前に据え、今ひとつは背後にぶらさげた。それ以来人間は、他人の欠点はたちどころに目につくのに、自分の悪い所は予見できない、ということになった」
※プロメテウスとはギリシア神話に登場する神でpro(先に)+metheus(考える者)で、「先見の明を持つ者」の意である。

映画史に残る名作「風と共に去りぬ」を知らない人はまずいない。しかし、作品を見た人はどれくらいいるだろうか。南北戦争の時代が舞台である。南部の大地主オハラの長女スカーレットは、同じ大地主ウィルクス家の嫡子であるアシュリーと彼の従妹メラニーの婚約発表を聞いて心おだやかでなかった。激しい気性と美しさをあわせ持つスカーレットは、多くの青年の憧れの的であったが、彼女の心はアシュリーとの結婚をかたく決意していたのだ。スカーレットは素行のあまり良くないレットに会い、何か惹きつけられた。突然、戦争の開始が伝えられ、スカーレットはアシュリーに振られてやけっぱちになりメラニーの兄チャールズと結婚。だがチャールズは戦争で病死。捕虜になっていたアシュリーがかえって来て、スカーレットは再び彼に愛を告白して、またまたはねつけられた。彼女は妹スーレンの許婚フランクが事業に成功しているのを見て、欺いて彼と結婚し、唯金儲けだけに生きるようになった。フランクが死んで、スカーレットはレットと結婚したが、まだアシュリーへの想いが断ち切れなかった。身勝手なスカーレットに愛想をつかしてレットは去っていった。スカーレットはこのとき初めてレットを愛していたと気付くのであった。
自らの美貌に自惚れて、アシュリーの愛を勝ち得て当然と独り合点した主人公に、周囲の人々が振り回されるというたわいもないストーリーだ。このスカーレットの自惚れた生き様に、自己愛性パーソナリティ障害の典型的な病像が描かれている。もちろんどこにでも身勝手で他人を利用するだけの人物はいる。適度な自己愛を保って利己主義と利他主義とのバランスが取れていることが成熟の証である。

精神科医・映画評論家
粥川(かゆかわ)　裕平(ゆうへい)
国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授